

プログラム												
音楽文化教育 プログラム	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
造形芸術教育 プログラム	5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	5	4
教育学 プログラム	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
心理学 プログラム	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

自己点検・評価単位	分析 項目	分析 項目	分析 項目	分析 項目	分析 項目	分析 項目
	6-6-4	6-6-5	7-1-1	7-1-2	8-1-1	8-1-2
教育学部	—	—	5	4	4	4
初等教育教員養成 プログラム	4	4	—	—	—	—
特別支援教育教員 養成プログラム	4	4	—	—	—	—
中等教育科学（理 科）プログラム	4	4	—	—	—	—
中等教育科学（数 学）プログラム	4	5	—	—	—	—
中等教育科学 （技術・情報） プログラム	5	5	—	—	—	—
中等教育科学（社 会・地理歴史・公 民）プログラム	4	5	—	—	—	—
中等教育科学（国 語）プログラム	5	5	—	—	—	—
中等教育科学（英 語）プログラム	4	5	—	—	—	—
日本語教育 プログラム	4	4	—	—	—	—
健康スポーツ教育 プログラム	4	4	—	—	—	—

人間生活教育 プログラム	4	4	—	—	—	—
音楽文化教育 プログラム	5	5	—	—	—	—
造形芸術教育 プログラム	5	5	—	—	—	—
教育学 プログラム	5	5	—	—	—	—
心理学 プログラム	5	4	—	—	—	—

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

2. 評価結果に対する総評

領域1～5及び7，8については教育学部全体として，領域6についてはプログラムごとに評価を行った。

領域1「教育研究上の基本組織に関する基準」の評価は「十分に適合する」であり，教育活動に関わる諸事項について適切な運営体制が整っており，十分機能しているといえる。

領域2「内部質保証に関する基準」の評価は，1項目が「十分に適合する」，2項目が「適合する」，1項目が「やや適合する」であり，自己点検・評価と関係者からの評価を行う仕組みが整備され，収集された情報が有効に活用されていることに加え，教員の活動を支援・補助する組織的な体制が確保されており，教員やその補助を行うものの質の維持・向上が図られているといえる。現在，教育の質をさらに高めるために，新たなFD研修の仕組みづくりを検討している。

領域3「情報の公表に関する基準」の評価は「十分に適合する」であり，教育学部の各類・各コースで策定されているアドミッション・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，ディプロマ・ポリシーがHP等により適切に公表，周知されているといえる。

領域4「施設及び設備並びに学生支援に関する基準」の評価は，3項目が「適合する」であり，学生の教育研究活動に資する施設・設備が整備され，有効に活用されており，また，授業の履修や生活面における支援体制，特別な支援を要する学生へ対応する体制が整えられており，有効に機能しているといえる。

領域5「学生の受入に関する基準」の評価は「十分に適合する」であり，方針に沿った適切な体制により入学者を受け入れている。また，その体制を検証することで改善が図られており，学生の受入状況も良好であるといえる。

領域7「教育の国際性に関する基準」の評価は「十分に適合する」または「適合する」であり，留学生の受け入れおよび，学生の留学に対する支援体制を整えており，また，国際事情や異文化理解を深めるための取り組みも評価できるといえる。

領域8「リカレント教育の推進に関する基準」の評価は「適合する」であり、社会人向けプログラムや科目等履修生の受け入れなど、社会のニーズに応じたリカレント教育の推進に組織的に取り組んでいるといえる。

領域6「教育課程と学習成果に関する基準」に関するプログラムごとの総評は下記の通りであり、「十分に適合する」または「適合する」との評価である。

本学部においては、概ね目標は達成されている状況にあると評価できるが、社会的要請や学生のニーズに柔軟に対応するため、各方面から積極的に情報収集を行い、適宜改善に努める必要があることは言うまでもない。

(初等教育教員養成プログラム)

教育課程と内容はカリキュラム・ポリシーに基づいて編成され、成績評価と卒業認定に係る審査はディプロマ・ポリシーに基づき適切な体制のもとで実施されている。さらに学習成果の向上や進路状況などから、プログラムの教育効果が一定の水準を越えて達成できていると判断できる。以上のことより、本プログラムの目標は一定の水準を越えて達成されていると評価できる。

(特別支援教育教員養成プログラム)

本主専攻プログラムは、特別支援教育に携わる教員の目的養成を行うものであり、ほとんどの授業科目が、教育職員免許法における特別支援学校教諭免許状取得のための規定に従って構成されている。卒業要件となる総単位数には、特別支援学校教諭免許状（視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の5領域）の取得と合わせて、基礎免許となる小学校教諭免許状の取得に必要な単位数が含まれており、卒業に必要な単位数だけでも他のコースより多い。さらに、担当教員が全障害領域に配置されていないことや、附属特別支援学校が設置されていないことなどの制約がある中で、特別支援教育や教員養成の今日的課題に対応した内容の「発展科目」を設定するなどして、最大限学習内容の充実を図ってきている。本主専攻プログラムの教育課程の内容と水準、成績評価と卒業認定に係る審査体制は適切なものと考えられ、令和6年度における本主専攻プログラムの学習成果は、卒業生22名のうち、14名（64%）が教員として就職、1名（5%）が福祉・療育分野への就職となっていることからうかがえる。また、特筆すべき点として、5名（28%）が大学院進学を果たしており、高度な専門性を有する教員（うち、4名が教員採用試験合格済み）・研究者の養成に貢献しているといえる。

(中等教育科学（理科）プログラム)

領域6（教育課程と学習成果に関する基準）に関して、教育課程については、教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）及び、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて体系的に編成され、当該分野の教育に相応しい授業形態（講義・演習・実験）も十分かつ適切に整備されており、学習指導等においても適切に実施されていると言える。学習成果については、卒業時アンケートの結果から、専門分野の知識、課題解決力、情報収集・活用力、論理的・批判的思考、プレゼンテーション力などが向上していることがうかがえ、卒業時における到達目標の達成、卒業研究を通じた研究能力の向

上等の学習成果が得られていると評価できる。

(中等教育科学 (数学) プログラム)

中等教育科学 (数学) プログラムについて、特に問題はなく、現状で良い状況にあるといえる。卒業時アンケートの項目 44「総合的に判断して専門教育の授業に満足できたか」という問いに対して、20 名中 11 名 (55%) が「大変満足している」、9 名 (45%) が「満足している」と回答しており、全員が肯定的に回答している。また、20 名中 12 名が教育職へ就職し、大学院への進学者 5 名を含めて、教育学部における学士課程教育としての教職への高い教育効果の成果といえる (卒業時アンケートの項目 4「卒業後の進路について」より)。大学院の再編 (教育学研究科を人間社会科学研究科に再編) 後の大学院進学者の人数の減少傾向には歯止めがかかった状態である。

(中等教育科学 (技術・情報) プログラム)

中等教育科学 (技術・情報) プログラムは、令和 6 年度「学士過程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書」の評価結果報告において、下記の 3 項目で良い評価を受けることができた。

----- 記 -----

(分析項目 6-1-1) 中等教育科学 (技術・情報) プログラム

メカトロニクス関連の授業において、モノづくりを基盤として統合的な課題解決力や技術と情報を使いこなす実践力を養成するための科目を開設している点や、教育者向けのデータサイエンス系の授業を開設している点は評価できる。

(分析項目 6-2-1) 中等教育科学 (技術・情報) プログラム

プログラムで獲得すべき能力の観点から授業の評価項目と基準を策定し、それに基づいてシラバスを作成している点は評価できる。

(分析項目 6-3-2) 中等教育科学 (技術・情報) プログラム

小中学生を対象としたイベントに学生をメンターとして参加させている点や、様々な機関と共同して多彩な実践活動において学生を積極的に参加させている点は、実践力を養成する上で評価できる。

以上の答申に対応しながら、良い点をより伸ばす方針で、昨年度に引き続き一層の教育効果を狙いながらプログラム内外での活動の充実を図っている。昨年度高評価を得た項目に対応する改善点について、下記にまとめる。

(分析項目 6-1-1) に関する活動及び改善点：

・本コースのキャップストーン科目である「メカトロニクス創造実習」において、「作物収穫ロボットの設計・製作」のテーマで活動を行わせることができた。本テーマは令和 5 年度の「石積みロボットの設

計・製作」と同等の高度な制御が要求されるものとなっている。

・令和2年度より開始した「数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム」の事業として、教育学部生（授業自体は全学部生に開放）を主な対象とした教養授業「教育のためのデータサイエンス」では、出来るだけ多くの学生を対象とするため、前期・後期にそれぞれ授業を行うことで、300名以上の学生の受講を堅持している。

なお、本授業において提出されたレポートを詳細に確認したところ、令和5年度と同様に、不正があることを見つけ出すことができた。数名のレポートにおいて、「AIによる文章の貼り付け」があることが判明したので、それぞれの学生に適切な処置（単位不可、説論、反省文の提出）を行った。この内容は（評価項目6-4-3）に記してある。レポートを詳細に確認したところ、数名のレポートにおいて、「AIによる文章の貼り付け」があることが判明したので、それぞれの学生に適切な処置（単位不可、説論、反省文の提出）を行った。この内容は（評価項目6-4-3）に記してある。

これは、広島大学としての授業の質を保証する上でも、また生成系AIを用いた授業に対する正しい態度の醸成に対して一定の効果があったものと考えている。

（分析項目6-2-1）に関する動及び改善点：

令和5年度より継続して、「各授業で使用している授業案、教科書、資料などのノウハウを会議室に集めて、互いにいつでも学習できるシステムの構築」を行っている。その結果、令和6年度のプログラム教員7名のうち6名から、主要教科の授業資料の提出があり、互いの授業内容の詳細を確認できるシステムが構築された。

（分析項目6-3-2）に関する活動および改善点：

カリキュラム内の教育・研究活動に加えて、学外の活動においても、学生が主体的に子どもたちと関わりながら、技術・情報に関する知見を広めていく活動を推進している。令和6年度に行った活動の概要を以下にまとめる。

・「第10回コベルコ建機カップ 中学生レスキューロボットチャレンジ2025」が開催された。本プロジェクトはコベルコ建機(株)との共催であり、プログラム立案から大会の運営までを、技術・情報系コースの学生が主体的に担当している点に特徴を持たせている。

・東広島市教育委員会とのコラボレーション事業として、一昨年度以前より行っていた「科学の芽育成講座」を行った結果、学部生延べ250人*時限がサポートに当たった。

・東広島市教育委員会生涯学習課担当の「理系・イノベーション講座」と(株)ミットヨへの見学会、並びに別日でのノギスづくりセミナーに3人の学部生サポートがあった。

・ガールスカウト日本連盟主催のセミナーについても関係性を深めており、一昨年度は1回の開催であ

った「ChipCamp in 〇〇」を2回、さらにその他のコラボ企画も複数回行った。

- ・御園宇小学校「御園宇タイム」にて、科学実験（おもしろ糸電話づくり）、および「自作のセンサーを使ったゲームプログラミング」講座にて2名の学部生が指導に当たった。
- ・三原市久井歴史民俗資料館にて、「はかりづくり」のセミナーおよび学生3名、準備を含めてのべ20時間の教育サポート活動を行った。
- ・一般企業とのコラボレーション事業として、テラル（株）で開催された「高校生向けの理系進路選択セミナー」において、人力発電機を使ったエネルギーの理解に関するセミナーを担当した。
- ・広島県立賀茂高等学校と木材加工研究室が共同で実施した「図書館+木育プロジェクト 2024 もっともっとハッピーな図書館にしよう!」において、学部生2名が図書館の問題を解決するために生徒が本棚を構想・設計し、制作する活動に補助（生徒から提出された構想スケッチを基に図面の作成、材料の準備、当日の指導・助言など）として参加した。
- ・木育普及委員会と木材加工研究室が共同で実施した「ひろしま木育アカデミー2024」に学部生1名、「ひろしま木育フェス 2024 体験型イベントー広島の木と森に触れて・知って・体験しようー」に学部生6名、「ひろしま木育フェス 2024 講演会&発表会」に学部生1名、「ひろしま木育トークカフェ 2024」に学部生1名、が運営の補助（準備・片付け、グループディスカッションの司会進行、ワークショップの実施など）として参加した。

上記活動に関連した研究を含めて、学部生が行った学会発表は以下のとおりである。

第53回 日本産業技術教育学会中国支部大会

- ・谷本紗羅ら 『自動演奏チェレスタを用いた文理融合型 STEAM セミナー』
- ・柴野響ら 『特別支援学校高等部における探究的な活動に関する取り組みーSTEAM 教育や ICT 教育を活用したパルプケースの製作ー』
- ・西川茉那ら 『理系女子育成と理系女性指導者育成を目指す小学生向け工作教室の取り組み』

第40回 日本産業技術教育学会四国支部大会

- ・谷本紗羅ら 『金属加工とレーザーカッターを組み合わせたスピーカーユニットの製作』
- ・足立星礼奈ら 『電磁石を利用した動くおもちゃの STEAM 型教材の提案』
- ・石崎芙月ら 『技術の授業で作成したレーウエンフック顕微鏡を用いた教科横断型教材の提案 ～技術から理科への応用～』
- ・柴野響ら 『組み立て精度と機能を関連付ける教材の開発-ライトレースロボットを用いた教材の提案-』
- ・西川茉那ら 『女子小学生のための STEM 教材の開発と理系女指導者育成の取り組み』

第75回日本木材学会全国大会（仙台）

- ・田中亮羽、木村彰孝：異なる樹種を用いて作られた木製玩具の評価ーでんでん太鼓による樹種特性の違いの認知についてー、R19-04-1300、2025年3月19日

(中等教育科学 (社会・地理歴史・公民) プログラム)

教育内容と方法は、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに基づいて体系的に組織され、実施されている。また、ほとんどの学生に学習成果の効果が確認できた。今年度（昨年度の活動結果）の到達状況は、昨年度とほぼ同等のため、本プログラムの目標は、(昨年度の活動結果と同様に)一定の水準を越えて達成されていると評価できる。

(中等教育科学 (国語) プログラム)

すべての分析項目について、⑤十分に適合する、あるいは、④適合する、と評価され、本プログラムの学士課程教育は十分な成果を挙げている、と判断される。

本プログラムは、段階的なカリキュラムに基づき、担当教員会として十分な連絡を取り、学生一人ひとりの学習を支え、生活実態に注意を払っている。

加えて、年間や各学年段階を通して担当教員会による諸企画と学生による自主的活動とが実施され、それらが相乗的な効果を生んで、教育・研究・進路のいずれにおいても、期待通りの成果が得られた。

また、全教員のコンセンサスを得ながらプログラム全体としての教育内容と方法の質的向上を目指している。

今後も、プログラム担当教員会として、学生一人ひとりの学習及び生活実態に注意を払うとともに、教員と学生との協働的な関係をもって、きめ細やかな指導に努める。

(中等教育科学 (英語) プログラム)

・教育課程の編成と授業内容及び授業方法は学位授与方針に即して適切な形で計画、実施されている。このことはディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに定められているだけでなく、卒業時アンケート結果にあるように学生側にもその実感が得られている。

・履修指導や支援については入念に実施した。結果として学生に混乱は見られず、スムーズに授業履修等を行うことができた。障害のある学生への対応については、実際にそのような事例が生じなかったことから、その実績はなかったものの、その体制づくりはできている。教員全員が英語に堪能であるため、留学生についてはスムーズな対応が可能である。

・成績評価については、教育課程方針に基づき、厳格かつ客観的に実施することができている。対面式の試験を行うなど成績の厳格化を保證するよう努めた。卒業判定に関しては、評価基準を学生にも周知した上で、実施されている。卒業論文に関しても、教員が他ゼミの学生の卒論についても確認する形を取っており、公正な形で実施されている。また卒業論文のフォーマットや字数制限などは、プログラムの母体となっている講座独自の HP (<https://dele.hiroshima-u.ac.jp/>) 上で広く公開している。

・授業以外でも、講座主催の教育・研究セミナーを 2024 年度には 2 回実施した。一つは 2024 年 11 月 2 日 (土) のホームカミングデーのイベントとして開催した、英語教育の最先端を知るオンラインセミナー「一期一会の英語授業」であり、現職の中高の教員や大学 (主に他大学) で教員養成を行っている

研究者、これから教育学部を目指す高校生が全国から参加した。もう一つは2024年11月9日（土）に開催した「現職の英語教員を招いての英語教育セミナー」であり、主に学部3，4年生の計約50名の学生が、2名の現職教員と1名の学力調査官から英語教師の仕事の実際について講話を聴いた後、討議に参加した。

・卒業後の進路は、進学・留学及び教職に就いた学生が8割、一般企業等への就職等が2割であったが、いずれも【専門教育について、将来（就職後）役に立つと思うか】を問う卒業時アンケートの間46「専門教育を総合的に見て」において、肯定的回答（「とても役に立つと思う」「少し役に立つと思う」）が100%であったことから、本コースの学生は適切な学習成果を得ることができていると言える。また、【大学入学時との比較】を問う問56～問68の全13項目中11項目において肯定的回答（「十分に向上した」「向上した」「やや向上した」）が90%を超えるなど、本コースの学生は様々な社会的スキル（例：「論理的・批判的思考力」）を身に付けることができたとの実感を得ている。

（日本語教育プログラム）

概ね一定レベルの水準を越えて達成されている状況にあると評価できる。

カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに則ったプログラムが実施されており、現時点で大きく修正・変更を検討すべき項目は見当たらない。学習成果に関しても、プログラムにおける学習の成果が認められており、教育内容に対する学生の満足度は高い。ただし、教員数の減少に伴い、プログラムの開講科目が削減されているため、カリキュラムの整備に関しては若干の課題が残されていると言える。

（健康スポーツ教育プログラム）

- ・教育課程は、文部科学省が定めている保健体育の教員免許状授与に必要な基準を満たした体系的なカリキュラムであり、適切な内容、水準、方法で実施されている。
- ・指導の方法、評価や審査の体制、支援体制も整っている。今後、組織的な取り組みのエビデンスを明確に残す必要はある。
- ・専門教育課程全体、卒業研究によって、十分な学習成果が上がっているといえる。進路状況や卒業生の意見からも、そのことが支持される。

（人間生活教育プログラム）

各項目のエビデンスに照らして評価した結果、「基準6-1 教育課程の編成及び授業科目の内容が、学位授与方針及び教育課程方針に則して、体系的であり相応しい水準であること」について、十分なレベルの水準に達していると判断できる。令和元年度より策定した新カリキュラムが完成し、3年目を迎えた。授業科目の配置や相互関連性がカリキュラム・ポリシーに即してより体系的となり、ディプロマ・ポリシーとの関連も明確になったが昨年度と比較すると、到達目標を達成できた割合が若干低下している。「基準6-2 学位授与方針及び教育課程方針に則して、適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」については今回新たなアンケート項目が追加されたが、学習支援システムの利用、学生同士の議論、文献調査、フィールドワークなど複数の授業形態で実施されており、プレゼンテーション力、

コミュニケーション力、主体的に学び続ける力、文章表現能力など、外国語の運用能力を除き、これらの能力の向上を学生自身が認識できるようになっていた。主専攻の到達目標が明確に学生に周知されていることによって、学生の学修の方向を適切に示しているといえる。「基準6-3 学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われていること」について、主専攻プログラム担当教員会を中心に、適宜実施しているチューター面談等を通じて学生の現状把握に努めており、必要とする学生のニーズを取得する機会を多く設けていることから、適切な履修指導と支援の体制が整っているといえる。「基準6-4 教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」について、主専攻プログラム担当教員会を定期的開催し、個々の学生の科目別成績を確認するとともに、個別の指導方針についても意見交換を行っており、公正な成績評価が継続して実施されている。「基準6-5 大学等の目的及び学位授与方針に則して、公正な卒業判定が実施されていること」について、提出された卒業論文の全教員による閲覧、卒業論文発表会の実施、教員全員による卒業判定会議などの審査体制を整備し、公正な卒業判定が実施されているといえる。「基準6-6 大学等の目的及び学位授与方針に則して、適切な学習成果が得られていること」について、卒業時の進路状況等からみた学習成果についても、十分な学習成果が上がっていると判断できる。特に、学生の卒業時アンケートから、当プログラムが目指す教育の目的と人材像に照らして、卒業時において学生が身に付けるべき技能や知識、態度などについて教育の効果が上がっていると判断できる。

(音楽文化教育プログラム)

教育課程は、文部科学省が定めている音楽の教員免許状授与に必要な基準を満たした体系的なカリキュラムであり、適切な内容、水準、方法で実施されている。学内の実技、論文指導とそれに伴う実技試験や論文発表会により、高い水準で専門技能や知識を着実に身に付けている。指導の方法、評価や審査の体制、支援体制も十分に整っている。進路状況や卒業生の意見からも、専門教育課程全体、卒業研究によって、十分な学習成果が上がっていると見える。

特に、音楽文化教育プログラムの特徴として、コース主催の演奏会、コンクール、学会及び各種セミナーへの積極的な参加を学生たちに促すことにより、学習成果の発信力、学生の協働性と主体性において成果を上げることを目指している。

(造形芸術教育プログラム)

教育課程の編成及び授業科目の内容が、学位授与基準(ディプロマ・ポリシー)及び、教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)に則して、体系的に相応しい水準で整備されており(基準6-1)、適切な授業形態、学習指導法が採用されている(基準6-2)と評価できる。

ディプロマ・ポリシーに即して、適切な指導、支援が行われていることも確認できた。(基準6-3)

カリキュラム・ポリシーに即して公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されており(基準6-4)、大学の目的やディプロマ・ポリシーに即して公正な卒業判定が実施されている(基準6-5)と評価できる。

大学の目的やディプロマ・ポリシーに即して、適切な学習成果が得られている(基準6-6)と評価できるが、分野の特性上、外国語の運用能力については、あまり向上しなかったと回答している学生も一

定数いる点について課題が残る。これに対しては、早い段階から留学を視野に入れた学修プランを立てられるよう、過去の例や留学しやすい時期を示すと共に、留学希望者がチューターに相談できる体制をとっている。

(教育学プログラム)

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づいて教育課程は十分に体系的に編成されており、分野の教育に相応しい授業形態や学習指導法等（研究・論文指導など）は十分に適切に整備されている。学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）は適切に定められ、分野の教育方針に照らした成績評価や単位認定は十分に適切に実施されている。学位論文にかかわる評価基準については学生に周知されており、十分に適切な審査体制の下で卒業認定が実施されている。また、専門知識の理解、研究手法の基礎となる技能の習得、実践的・総合的な能力・技能（課題解決力、情報収集・活用力、論理的・批判的思考、プレゼンテーション力など）の向上について、一般的に学習成果が認められた。

また、教育学系コース「コースディベート」、教育学総合演習 A・B、卒業論文構想発表会、卒業論文発表会、進路に関する教室懇話会など、教育学プログラムの縦の重層性（学部1年から大学院まで）と横の横断性（10 の研究室・教育学分野専門領域）を編み合わせたプログラム独自の取組を行っており、その成果や改善点等の組織的な検証・確認体制も構築できている。

本プログラムは、教育学部の1主専攻プログラムとしての教育活動だけではなく、全学の教員養成課程・教職課程を担っている点、社会教育士などの特定プログラムを担っている点などにも鑑みて、教育学を専門に教育する本プログラムが教育学部に位置づきながら、教育学部の研究・教育の水準の向上と全学の教職課程の維持・発展に引き続き貢献できる体制と運用を継続していく必要がある一方で、卒業生の大学院への進学者数の増加への取組も含めた研究者養成の大学院教育プログラムとの接続と有機的連関（系統性と横断性）をさらに強化していく必要がある。

(心理学プログラム)

- ・教育課程は、公認心理師や認定心理士の資格が定めている基準を満たした体系的なカリキュラムであり、適切な内容、水準、方法で実施されている。
- ・指導の方法、評価や審査の体制、支援体制も整っている。組織的な取り組みのエビデンスを明確に残す必要はある。
- ・専門教育課程全体、卒業研究によって、十分な学習成果が上がっているといえる。進路状況や卒業生の意見からも、そのことが支持される。